

創造的な社会を作るための 心理学者の回り道

東京大学大学院教育学研究科（情報学環兼担）教授

岡田 猛（おかだ たけし）

Profile — 岡田 猛

1994年、カーネギーメロン大学大学院博士課程修了（Ph.D.）。ピッツバーグ大学学習開発研究センター博士研究員、名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授、教授、東京大学大学院教育学研究科准教授、東京大学大学院情報学環准教授などを経て、2008年より現職。専門は創造性の認知心理学。著書は『科学を考える』（編著、北大路書房）、『協同の知を探る』（編著、共立出版）、『実践知』（分担執筆、有斐閣）、『感情と思考の科学事典』（分担執筆、朝倉書店）など。



芸術創作や科学的発見などに代表される高度なレベルの創造性は、進化の過程の中で人間のみが獲得した能力である。ではそのような創造のポテンシャルを備えている人間は、人生の中でどのように創造活動を行っていくのだろうか。そして、創造的な人々を育成・支援するために、心理学者はどのような貢献ができるのだろうか。

創造性の定義と分類

創造性という複雑な現象を定義することは容易ではないが、新しく、質が高く、適切なアイデアや物事を生み出すことというのが、多くの研究者の間で共通した定義であると言われている（例えば、Kaufman & Sternberg, 2010）。

そして、どのようなレベルの新奇性、クオリティ、適切性を想定するのか、誰がそれを評価するのかによって、創造性はいくつかのタイプに分けられる。ワイスバーグ（Weisberg, 1993）など多数の研究者が、創造の所産の外的評価に基づき、大きな創造（Big-C）と小さな創造（little-c）を分けている。同様にボーデン（Boden, 1990）も、創造性を歴史的創造性（H-Creativity）と心理的創造性（P-Creativity）の二つに分類している。これらの研究者はいずれも、ノーベル賞級の科学的発見やピカソのような有名な芸術家の作品に見られるような、歴史的社会的に見て新しく意義のある物事を生み出すようなタイプの創造性と、仮に社会の中では

既に誰かが生み出していたとしても、その個人にとっては新しく価値のある物事を生み出すようなタイプの創造性とを区別して捉えるべきであると主張している。この二分法に対して、リチャーズ（Richards, 2010）は、「日々の生活の中での創造（everyday creativity）」という概念を提唱している。これは、どのレベルの創造性の持ち主でも経験する創造過程の主観的な体験としての「発見」の感覚に目を向けた概念である。

創造的に生きる人々の二つのタイプ

このような創造性の分類の仕方は、創造的な人々を分類する際にも有益な示唆を与えてくれる。この点について、筆者ら（縣・岡田, 2010；2013；岡田・縣, 2013）は、創造的人材を「創造的熟達者」と「創造的教養人」という二つのタイプに分類している。

創造的熟達者とは、歴史的創造性の達成を目指して何年にもわたって創造活動に携わり、専門的な知識や技術を身につけて創造活動を続けている人を指している。創造的熟達者の創造過程に関しては、現代芸術家を例に挙げると以下のようなことが明らかになっている。芸術家は10年以上の創作活動の積み重ねの中で、自らの創作活動を方向付ける中心的なテーマである「創作ビジョン」を構築し、「ずらし（創作活動の制約条件の意図的変更）」や「驚きを伴う発見」と、それについての「省察」を積極的に利



写真1 武辺さん(右)とヒマラヤの鷲の板絵(左)

用しながら、新しい表現を創造していく存在である (Okada, Yokochi, Ishibashi & Ueda, 2009 ; 岡田・横地・難波・石橋・植田, 2007 ; 高木・岡田・横地, 2013 ; 横地・岡田, 2007)。これらの活動は決して個人の中だけで進行していくのではない。芸術家は他者の作品や社会の出来事から触発を受けたり、また批評家や鑑賞者からの評価を受けたりしながら、日々の作品制作を行っている。すなわち創造的熟達者は、創造活動の領域に蓄積された知見 (ドメイン) や領域に所属する人々 (フィールド) との相互作用のシステムの中で創造活動を展開しているといえる (Csikszentmihalyi, 1999)。

一方、創造的教養人とは、創造活動を専門としているわけではないが、個人的創造性の達成を主たるモチベーションとしながら、何らかの形で創造活動に携わる人生を送っている人を意味している (縣・岡田, 2013)。彼らも実際の創作活動の体験を通して、創造の過程や方法に関するある程度の理解と、日常の中で創造活動を楽しむ態度や習慣を獲得している。縣・岡田 (2013) は、社会の中に創造的熟達者だけでなく、創造的教養人も多数存在することが、創造的な社会の形成につながると主張している。

ここでは、創造的教養人の具体例を筆者が最近行ったインタビューに基づいて紹介しよう。

武辺安雄さんは、現在 73 歳。58 歳のときに警察官を早期退職して、その後創作をしながら悠々自



写真2 書の例



写真3 彫刻の例

適に暮らしている (写真1)。警察学校を卒業後、警察署の仕事で書類を書かなければならなくなったが、字があまり上手ではなかったので、21歳の時に先生について書道を1年間習うことにした。その人からの個人教授で書道の基礎が身についた。その後転職になったので、それからは誰にも習わずに我流でやってきたが、県の展覧会に時々出品をしていたら楽しくなった。仕事が忙しくてできないときもあったが、断続的に35年以上書いてきた。

書道を習ったことは、仕事で看板をかいったり広報誌を作ったりするのに大変役に立ったが、それ以上に書道にはずっと日常生活を超えた憧れを感じてきた。今は特に書いていなくても、書道とは心が通じているという感じがする。道具を持たなくても字が書けるという気がする。雲をみれば雲に字が書けるというように書道の雰囲気が身体になじんでいる (写真2)。

退職して「彫刻もいいな」と考えて、人間の顔を作ろうと思い、空き地においてある丸太の木をもらって帰って全くの我流で顔を彫ったりした (写真3)。またあるとき雑誌を見ていたらヒマラヤの鷲の絵があって面白いと思ったので、ケヤキの板に元の絵をまねて描いてみた (写真1)。

今はそういったことを楽しみながらやっているが、それが芸術と言われれば芸術だし生活だと言

われると生活だ。書も看板の字も彫刻も生活の仕事も、家の居間にテーブルを置いて庭を眺めることも自分の中では全てつながっていて、創作の気持ち（つまり美しさと面白さについての気持ち）は同じである。

でも、作品を人に見せようとは思っていない。芸術品というのは美術館に飾っておくものではなく、日常生活の中にあるものだと思う。芸術表現の底にあるのは、自分を見つめ直したいという気持ちだ。作品を自分の鏡として見つめ直すことで、そこからもう一歩上がるための資料になる。どんなに下手なものでも、自分の鏡だ。上手なものができたら嬉しくなるし、そこからさらにもう一歩進める。楽しく美しく生きることが芸術なのだと思う。

筆者は最近このような人たちのライフストーリーを収集中であるが、彼らは共通して以下のような特徴を持っている。①創造活動についてのある程度の理解と実践経験があり、創造活動と共に生きる人生に価値を置いている。②人生のどこかの時点で「創造活動をフォーマルあるいはインフォーマルに学ぶ経験」を持っている。これら二つの点は、創造的熟達者とある程度共

通した特徴であるが、それに加えて、③彼らは創造活動のコミュニティ（例えば、芸術の場合はアートマーケット等）に発信しようとする意志を全く持たないか、少なくとも強くは望んでいない。この点では、彼らは歴史的創造性ではなく、個人的創造性の達成（上述の例で言えば、楽しく美しく生きること）を主たるモチベーションとしているといえるだろう¹。

創造的な社会と心理学者の仕事

創造的熟達者とともに創造的教養人が増えることは、創造的な社会が実現するための必要条件だと考えられる。図1は（特に芸術領域の）創造活動の望ましいコミュニケーションのあり方について、筆者の考えを表したものである（岡田, 2013）。この図は、社会のさまざまな成員がそれぞれ自分なりの方法で社会に対してアイデアや表現を発信し、互いに触発しあうことが、創造的な社会の達成に必要なことを示唆している。そのためには、創造的熟達者だけでなく、一般市民も創造的教養（創造についての理解や態度）を身につけることが必要だろう。

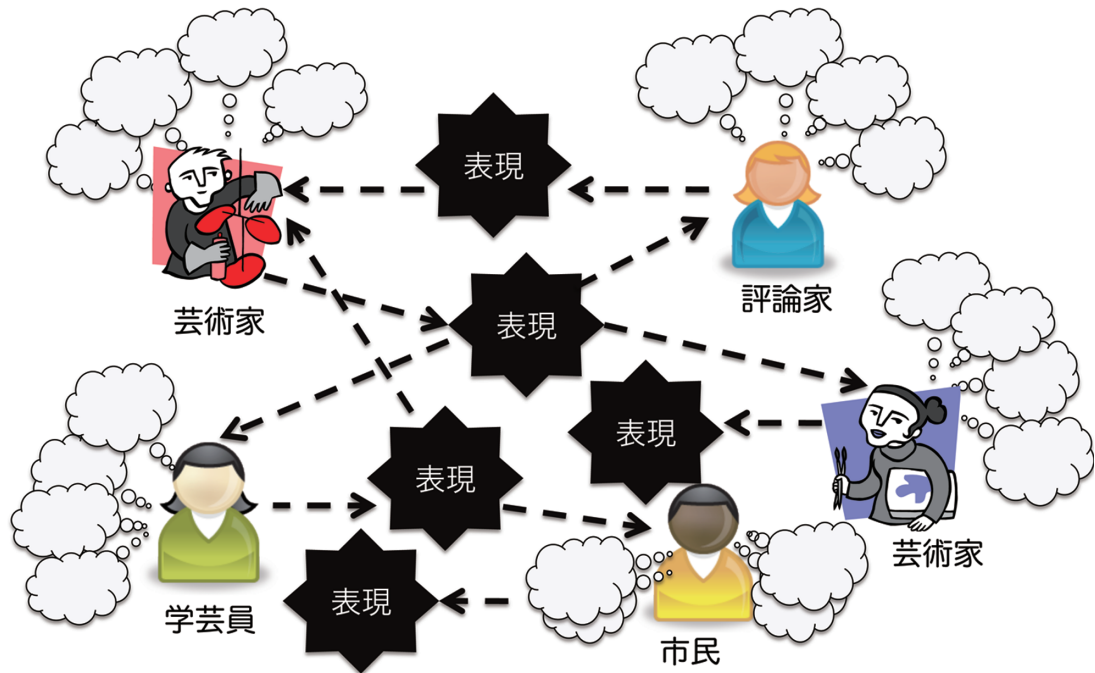


図1 創造のコミュニケーションのあり方（芸術表現の例）

では人々の創造性を育成・支援するために、われわれ心理学者には何ができるのだろうか。その問いの一つの答えは、基礎研究と実践研究を緩やかに連携しながら実施していくことによって創造活動についての知見を蓄積しつつ、創造性育成・支援の試みを行っていくことだと筆者は考える。基礎研究の現状については、カウフマンとスタンバーグ (Kaufman & Sternberg, 2010) のハンドブックが包括的に紹介しているので参照されたい。このハンドブックのチャプターや最近の創造性に関する研究論文を読むと、脳活動や潜在的認知過程、情動、身体活動、社会文化的活動等の関わりの中で創造活動を捉えようとする研究が近年増加していることが読み取れる。基礎研究の知見が蓄積され創造過程のモデルが精緻化されてくると、その知見に基づいて創造性支援のための実践を改善していくことが可能になる。一方で新しい実践を企画しその過程を研究することは、基礎研究の知見を現場で検証したり、研究の新しい方向性を示唆したりするような知見をもたらす。筆者らは大学生や市民を対象に美術展示やワークショップ等を実施し、その効果を検証する実践研究も行っている (縣・岡田, 2010 など)。創造的な社会を実現するために心理学者が貢献できることはたくさんあるに違いないが、筆者はこのような基礎研究と実践研究の連携を通して創造性育成・支援の試みを地道に進めていくことが、回り道のように見えて、実は創造的な社会を作るための近道であると考えている。

1 なお、創造的教養人の範疇には、この例のような人だけでなく、例えば家族においしい創作料理を作っている主婦や、自分でいろいろと工夫して自宅を改装しながら暮らしているといった人たちも含めてよいだろう。

文 献

縣拓充・岡田猛 (2010) 「創作の過程や方法を知る」美術展示及びワークショップの効果. 『美術教育学』 31, 13-27.

- 縣拓充・岡田猛 (2013) 創造の主体者としての市民を育む: 「創造的教養」を育成する意義とその方法. 『認知科学』 20, 27-45.
- Boden, M. A. (1990) *The creative mind: Myths and mechanisms*. London: Weidenfield and Nicholson.
- Csikszentmihalyi, M. (1999) Implication of a systems perspective for the study of creativity. In R. J. Sternberg (Ed.), *Handbook of creativity*. New York: Cambridge University Press.
- Kaufman, J. C. & Sternberg, R. J. (2010) *The Cambridge handbook of creativity*. New York: Cambridge University Press.
- 岡田猛 (2013) 芸術表現の捉え方についての一考察: 「芸術の認知科学」特集号の序に代えて. 『認知科学』 20, 10-18.
- 岡田猛・縣拓充 (2013) 芸術表現を促すということ: アート・ワークショップによる創造的教養人の育成の試み. *KEIO SFC JOURNAL*, 12, 61-73.
- 岡田猛・横地早和子・難波久美子・石橋健太郎・植田一博 (2007) 現代美術の創作における「ずらし」のプロセスと創作ビジョン. 『認知科学』 14, 303-321.
- Okada, T., Yokochi, S., Ishibashi, K. & Ueda, K. (2009) Analogical modification in the creation of contemporary art. *Cognitive Systems Research*, 10, 189-203.
- Richards, R. (2010) Everyday creativity: Porcess and way of life — Four key issues. In J. C. Kaufman & R. J. Sternberg, (2010) *The Cambridge handbook of creativity*. New York: Cambridge University Press.
- 高木紀久子・岡田猛・横地早和子 (2013) 美術家の作品コンセプトの生成過程に関するケーススタディ: 写真情報の利用と概念生成との関係に着目して. 『認知科学』 20, 59-78.
- Weisberg, R. (1993) *Creativity: Beyond the myth of genius*. New York: Freeman.
- 横地早和子・岡田猛 (2007) 現代芸術家の創造的熟達の過程. 『認知科学』 14, 437-454.